

## アイデア賞

アイデア賞は、取組の実績は必須ではなく、実施計画  
中や研究過程でも応募が可能となり、将来的に脱炭  
素につながるようなアイデアや提案を募集しました。  
厳正なる審査によって選ばれた2  
組が応募アイデアを披露しました。



▲ 左から日野原楓さん、丹野悠太さん(獨協大学国際  
環境経済学科米山ゼミ地球温暖化防止プロジェクト) ▲ 平松加代さん

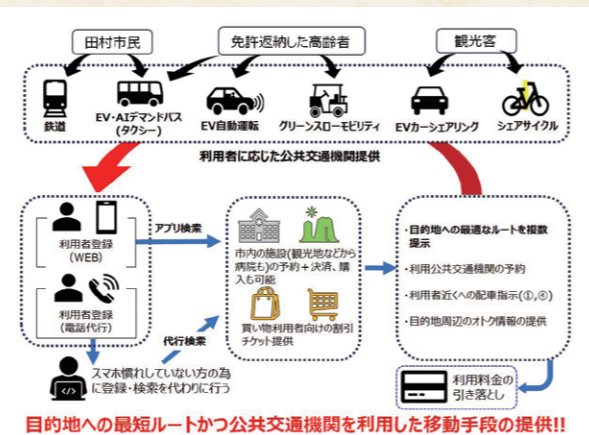
## 獨協大学国際環境経済学科米山ゼミ 地球温暖化防止プロジェクト

### 福島県田村市での脱炭素× MaaS を復興まちづくりに活かす提案

福島県田村市は、市域が広く交通整備が不十分であるため、市民や観  
光客は自家用車に依存した生活スタイルです。公共交通機関の課題  
を解決するべく、田村市内で再エネを利用した「MaaS」を導入するこ  
とで自家用車依存から公共交通への転換を図ります。また、地域新電  
力を立ち上げることで雇用の創出や電力の対外流出を下げることに  
よる地域活性化など脱炭素を目指すことによるメリットが地域内にも  
還元される仕組みを提案しました。

#### 審査委員長コメント

公共交通機関が不便な地域で、自家用車を使わず、地域の再エネを利用した  
「MaaS」(Mobility as service)の導入を検討しており、すでに自治体に働  
きかけている点も評価しました。



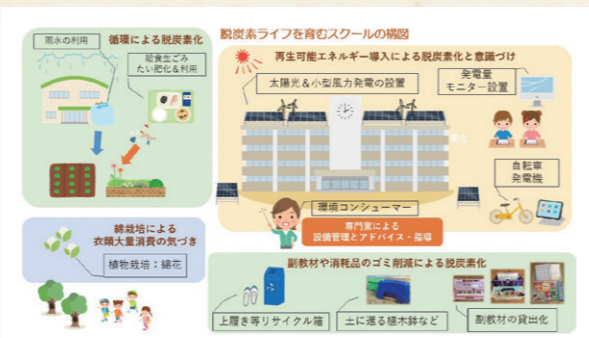
## 平松加代

### 脱炭素ライフを育むスクール

脱炭素社会を創り維持していくために、将来を担う子どもたちが育む環境を見直していく事が重要です。それは一時的な環境教育や特別なモデル校ではなく、誰も普段通う学校において日々体感できるものであるべきです。エネルギー、衣類、食べ物など、私たちは何をどのくらい使って生活しているのかを実感できる仕組みやリサイクルやリユースが当たり前である感覚を身に着ける工夫も地球温暖化を悪化させない手段の一つと考えます。

#### 審査委員長コメント

世論調査で若い世代が「気候変動を知らない」という結果が出ています。小学校を脱炭素のプラットフォームとして位置付け、再生可能エネルギーやコンポストなどの脱炭素に資する行動を当たり前にしていくのは大事な視点です。



## アンケート結果

### ファイナリストの声

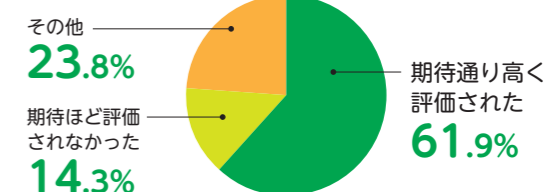
対象者:ファイナリスト24団体

回答数:21団体

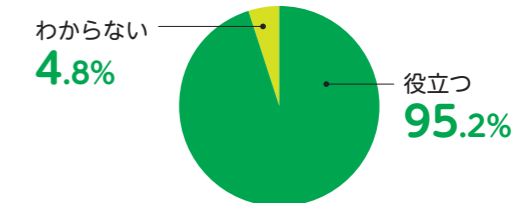
#### 感想

- ・自身としては今回初応募でしたが、通常の学会賞と異なり、学生や市民団体の方も含む広く一般の方が来場されかついつ名前が呼ばれるかわからない臨場感によって、授賞式が大変盛り上がりを感じました。これからも継続していただけることを期待します。
- ・今回はじめてエントリーシートを書いたことで、自分たちのこれまでの活動を振り返り、客観的に見つめる良い機会になりました。革新的なイノベーションも大事ですが、生活や暮らしに落とし込まれない限り脱炭素は他人事なので、私たちのような身近な取組も取り上げて下さりありがとうございました。
- ・今後も表彰をもらえるような活動ができるように、生徒たちと持続的に活動していきたい。今回はこのような機会をいただき感謝しています。

貴団体がファイナリストに選ばれたことは周囲でどのように評価されましたか?

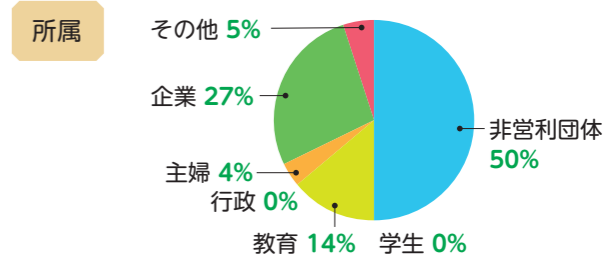
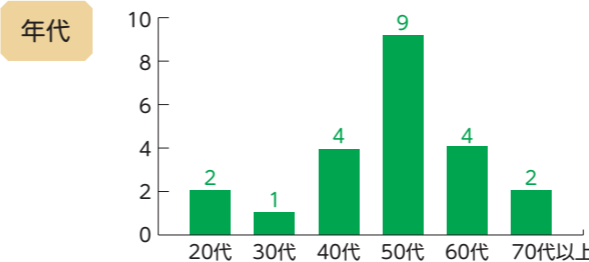


今回の脱炭素チャレンジカップの出場は、貴団体の今後に関与すると思われますか?

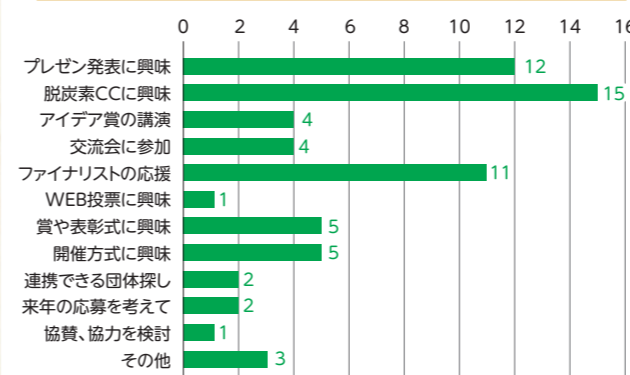


### 会場参加者・オンライン視聴者の声

回答数:22名



#### 参加目的をお選びください。(複数回答)



#### 感想

- ・脱炭素にむけたポジティブな空気感に満ち溢れていて、素晴らしいイベントだったと思います。
- ・登壇者の方の「脱炭素は我慢・忍耐ではなく、ワクワクするものなんだ」という言葉がありましたが、まさにこのこのイベント自体が、そうしたワクワクの渦をいっそう大きくしていることを実感しました。